
幸せが猛ダッシュでやってくる

やまゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せが猛ダツシユでやってくる

【Nコード】

N2963E

【作者名】

やまゆ

【あらすじ】

まあギリギリ平凡な日々を過ごしてきたヘツポ高校生コウが、デンジャーな毎日をお約束する美少女、瑠璃の封印を解いちった…！！空を駆け大地を引き裂く美少女の前に、少年の幸運やいかに？萌えと言えなくもない瑠璃の巻きおこす、大長編銀河一大ヘツポコスペクタコー。もしかしたらラブもあるかもよー！！…の予定

ブローグ

さくら

さくら

さくら

気が遠くなるほどの

花の渦の中で

俺は

おもわず

「ぎいやあああああああああーっつつつ
！！！！ちよつ、コレはマジで死ぬうううっ！！！！ 誰か、助けて
えええエエエツ！！！！！」

絶叫していた！！

やあ、良い子のみんなこんにちはー！

俺の名前はコウ！ 花も恥らいまくりのピッチピッチの男子高校生
さ！

ええーと、俺が今何をしているかっていうとね、うん、俺、今、桜
の森を全力疾走で駆け抜けています。

その全力ぶりたるや、クラスのアイドルが見ている体力測定の際の
全力っぷりを五倍ほど上回る全力ぶり！

もうね、爽やかボーイな自分らしさを冒頭から演出しまくり！

ああつ！ でもって、俺の約五十メートル後ろにはものごっつい美
少女がいるんだ！ ええそらもう、純度100%血統書付きのもの
ごっつい美少女が！！！！

具体的に言うと、奇声を発し鬼の形相でビームを乱射しながら猛スピードで追いかけて来る半裸の美少女が……！！！！

う~~~~ん、俺が今感じている恐怖が、わかるっかなあ~~~~？
ッハ！ わかるわけねえよなあ！！！！ 所詮他人の痛みだよね~~~~
っ！！！！

本当、この恐怖はお化け屋敷とかそういう枠に収まりきらないから！
エンターテイメント感覚のスリルじゃないから！！！！

甘くキケンな夜……とか、そういう危険度じゃないから！！！！
素でチビルから！！！！

もうね、この、俺、超デンジャー！ かつ、超、アリエナイ！
でも、半裸の美少女はちよつとオイシイかも……な状況が、ほん
のちよつとでも解つて頂ければ、お兄さん満足だから。それでもう
思い残す事ないから。うん。

って、俺はまだ死にたくNEEEEE！！！！！！

ぐるぐる回る頭で必死に考える。

なんでだ？

なんで、こんな事になってるんだ！？ 俺！？

俺の日常はどこに行った？？？

第一話：幼馴染と俺。

ぐるりと山脈に包囲された、そこそこ栄える盆地。

それが俺の住む町。

夏は暑く、町にうだつた鹿が溢れる。冬は寒く、積もった雪の上をイノシシが転ぶ。

ここでは人間は自然様に寄生するちっぽけな存在でしかない。町から離れること、数十分。

連なる山脈にへばりつくようにして、ぽつんと神社がある。

それが俺の家。

健気に大山脈にへばりつくその姿は、まるで必死に抵抗する文明のよう。

正直、半分くらい山に飲まれてる。

山、「なめんじゃねーよ」ってか。

俺ん家のすぐ背中からは、つつけば仙人やら天狗やらが出てきそうな、怒濤の大山脈だ。

俺たちは幼少のころより、暇さえあれば山で遊んでいた。なにしろ裏山が大山脈である。

そう、今日も。

粉雪のように散ってゆく桜を背に、勝気な瞳が俺をまっすぐ見つめていた。

「怖いのか？」

瞳の主は、ニヤリと笑った。

「こ、怖かぁないさ！」

「ふーん……」

フフン、と少女は可憐な顔を歪める。信じてない。ていうか明ら

か俺を小バカにしている。

俺は困って、視線を逸らす。可憐なセーラー服。白のハイソックスに包まれたほっそりした足。だが、この足が凄まじい蹴りを繰り出す事は身をもって確認済みだ。

ざあ……

桜の森が揺れる。

春の山 幼馴染と 二人きり。

健全な男子高校生なら布団の中で身悶えしそうなシチエーションだが、俺の心境は怯えるチワワ。

彼女は大和弥生。俺の幼馴染。

家が比較的近所、という安易な理由で親同士が交流を始めた事が、俺のサンドバック人生の幕開けであった。

勝気な瞳に、可憐な容姿。

しかし性格はだんじり祭りの男衆よりも荒い。

そして、ジャ アンをも凌駕する奇跡の自己中さ。

もちろん、幼馴染カッブル！ なぐんて甘い展開は微塵もなく、俺と彼女の過ごした十七年、俺〓サンドバッグの図式は揺ぎ無い不動の地位を獲得している。

弥生はいつも、気まぐれで無理難題を俺に突きつける。

まさに、今も。

「えーと、怖くはないんよ？ 怖くは無いんだけどね？ 弥生さん、つまり貴方はこの、うららかあゝな午後に、この暗くて陰気でじめじめとした洞窟に入れてゆーんっスね？ 一人つきりで！」
「そーっスよ。」

事もなげに言い放つ弥生。

俺はちらつと、一番見たくない方向 後ろを振り返る。

そこには、ぽつかりと洞窟が口を開けていた。

申し訳程度に、立ち入り禁止の看板がかかっている。

桜の森にばかりと開いた黒い穴は、非常に不気味だ。

決して入ってはならんぞ、鬼に喰われてしまつぞ…

…

思わずゴクリと喉が鳴る。

「え〜と、そりやまた、なんで」

「奥に何があるか気になるじゃないのっ！」

俺はボンバー気になりません！ でも言えない！

「……………自分で行つたらいいのに…」

「あ！？ なんか言つたか」

「なんもないっす」

チキン俺。

ぺしっ！ と懐中電灯が投げつけられる。

「私先に帰ってるから。中に何があつたか教えてよ。もう気になつて気になつてもう夜も眠れないの！」

嘘つけ。授業中までグッスリのくせしてからに。

俺は、洞窟をおっかなびつくり覗いてみた。

ひゅごおおおお……

湿った冷気が頬をなでる

真つ暗な、闇。

「うへえ……………」

思わずあとじさる。

「さっさと行きなさいよ！ 脳髓抉り出すわよ！」

弥生の罵声がギリギリと俺の背中を押す。

うつ、怖くないと言つた手前、後には退けん……。どの道、弥生様に逆らう者には、シバきあるのみである。

逆らつて山でシバき倒されるか

おとなしくちよつと勇氣を出してみるか、二つにひとつ。

「ええい、男はどきよーっ！奥の奥まで行ったらあーっ！俺の男ぶりに惚れるなよっ！」

「よっ！ コウ！ それでこそ男の子っ！ そこに痺れない憧れない！」

お願い！ 少しくらいは痺れて！ 憧れて！

はあ、ホント調子のいいこと好き勝手言いやがって……心の中で深あゝくため息をつく。そして

俺はぐつと息を止めると、闇の中へ足を踏み入れた。

踏み入れるんじゃ無かったわ。マジで。

第二話：洞窟と俺。

ピチョー——————ン

細いライトの明かりを頼りに、途中、岩壁にぶつかったりコウモリの攻撃を受けたりしながらも、なんとかかんとか不気味に深い洞窟をよろよると進む健気な俺。

なんだかだいぶん奥まで来てしまった。

「うっ……さつきは、ああ言った、けれども」

洞窟、チョーこえええええ

洞窟、マジパねえーこええー——————！！

「ホント、こんな所に洞窟とか、しかも思ったより深いとか……自然の人格疑うわー。自然空気読めやー……うっ……暗い……」

不気味に続く洞窟に、先ほどの俺の威勢はしおしおのパーに萎びていた。

ほのかに香るは苔の匂い。さつき踏み碎いてしまった謎の物体がガイコツとかじゃありませんように！

っていつか洞窟長えー！

もう三十分くらい歩いたよね！？

もうちょこつとだけ続くのじゃと言っといてたつぷり三十巻続いた某漫画なみに長い。もうここらで終わつとかね！？ マジ、終わつとかない！？ 何処まで続くのこの洞窟！？

自然の奥深さの前に俺涙目！

「大体ねえ、こんな裏山の洞窟の、奥まで入ったって何があるってワケでも無いでしょうに。そらあ、何だかむおうれつにイワク

有り気ではありますが……うん？」

不意に蘇った遠い記憶が、脳内ゲリラ上映会を開始。そう、あれは確かいじーちゃんと初めて裏山に行ったとき……

こりゃ！ コウよ、その洞窟に近づいてはいかん！

ふえー、なんで？ じいちゃん

ふ。コレだから何で何で病のガキンちょは……この洞窟にはな、鬼が封じられておるのじゃよ。

おにい？

そうじゃ、この洞窟には、ある言い伝えがあつてな……。コホン その昔、天から邪なる鬼来たりて、世に災いをもたらしたり。かの鬼が腕の一振りで、空は裂け大地よりは大水噴出し、鹿が空を舞ったそう。

ひいー！ 鹿が空を！？

いかにも。じゃがな、鬼降りたすぐのち、宙より聖なる光降りて、この邪鬼を打ち倒さん。人々、大いに喜び三日三晩踊り狂いたり。……そうして、鬼には超強力な鎮めの鎖が施され、この神社が建立されたのじゃよ。コウよ、決してあの洞窟に入ってはならんぞ、……入ったら最後、今でも復活のチャンスを虎視眈々と狙っている鬼に、まるつと頭から食われてしまうぞよ。

ひいひいひいん！ まるつとこわいひいひい！ ……まるつと？
そうじゃ！ まるつとじゃー！ そして腹の中でツルツと溶けるのじゃー！

うわああああん！ ツルツとこわいひいひいっー！
ふおーふおー……。ええ声で泣きよるわい。

「……鬼……ね。……フツ」

幼かった。と、俺はホ口苦い思い出を噛み締める。

あの腐れドS爺の真つ赤な嘘を、まるつと丸ごと信じてしまうなんてあまりに無垢だった！ 腐れジジイの恐怖話、特にツルツとのくんだりは、その後暫く俺を夜中トイレに行けない体にした。毎夜俺は苦しみ、そして洞窟の奥に眠るであろう鬼に思いを馳せた。

布団の中で泣きながらおもらした屈辱を、俺は忘れない。今まで忘れてたけど、これからはぜってー忘れない。あの頃、天使のように無垢だった俺をゴミ箱にスローイン！

「鬼とか居るわけないじゃない！ーい！ この科学の時代に！！
！ はっはっは。」

ピチョーーーーーーーー

「ひぎあつ！ ごめんなさいごめんなさい！！」

って、水滴かよ！

おどかしやがってー！ このこのおー！ こんのコンコンコン
ノ！

カコーン

「ぎゃっ」

って、なぐんだ木の枝かよ！ 木の枝だよね！？ なんか、ムンクの顔みたいな模様があるけど。

カサカサカサ……

何の音！？ 何の音が判らない！ まさか、ゴのつく六本足の原生生物！？

大丈夫大丈夫まだ大丈夫、大丈夫？ うん大丈夫だ大丈夫大丈夫な
いお化けなんてないさないさお化けなんてないさないさお化けなん
て。こ、怖い時、怖いときはええーと手に…… 人人人人。ゴクン！
イける？ うん余裕！ コウ行きます！
「うおおおお！ 俺はもう坊やじゃないんだああああ！！！」 鬼
がナンボのもんじゃああああああい！」
俺は猛烈発進した。

べしーんっ

「ぐなっぷる！」

行き止まりだった。

第三話：えくすたしーと俺

「ちょっとさあ……コレは無いよね？ 人がさあやつと本気出したのに、その出鼻を挫くとか無いよね！ 挫くって言うか、骨、砕く気だったよね？ 見てコレ！ 鼻血が止まんないいいいい！！！」

真つ暗闇の中、一人岩壁に向かってキレル鼻血ブー男。不審者とか言っなあ！

人間はなあ、誰にも見られてないところではフリーダムなんだよお！

っていうかホントこの洞窟空気読めやー！ 俺さあ、わざわざ回想までして『この洞窟にはなんかあるよね？』的な雰囲気醸し出してたよね？

それが、まさかの壁。壁ですよ。

財宝も鬼もゾンビも無く、壁。トラウマ植えつけるほどに期待させという肩スカッシュもいいところ！

「はあ、帰るか……。」

『は？ なあ、んにも見つけれなかったですって！？ あんたの利用価値はミミズの鼻くそ以下ね！』

うっ、弥生の暴言が耳に浮かぶぜ……。

ハア。俺がため息をついたその時。

こっん

「ん？」

何か硬い物が腰に当たる。岩壁か？ いやしかしなんだろう、妙にスルー出来ぬこの感じ。自然物にしては妙に直線的というか。

「何だ？」

岩壁からニユツと突き出たソレを、そつと握ってみる。

「んぎぎ」

引つ張つてみるも、びくともしない。が、

ひんやりとした棒状のソレは、吸い付くように俺の両手にすっぽりフィット。そして、あろうことか、鈍く発光。

「あぁっ……ナニコレ……！？ 新種の蛭！？ お兄ちゃんなんで蛭こんなに大きくて硬いんー？ 違うよね、蛭じゃあないよね……うう、硬くて太つといモノがボクの手の中に入ってるうう！ あぁっ！ 嘘ぁ……あ、あああん、だんだん熱くなってくよおおお……」

じんわりと発熱し出す謎の突起。

それどころか、全身に弱い電流が流れているような気がする。

ああ、全身を快感が……。

さすがに不気味になってきた。しかし、人間、湧き上がる好奇心からは決して逃れられないのである。未知なる物質を前に、思わず俺は手に力を込めてしまった。いや、力を込めるってゆーか、気がついたら渾身の力で引つ張つてた。もう、壁に片足かけて思いつきりだつて、気持ちいいからつい……

……何度も言うけどこれは未知へ探究であつて、断じて俺は変態ではないぞ！

「ああ……ンギモチイイイイ……あ、なんか、もうちよつともうちよつとで何かが解る気がしないこともないかも……」

「あばばっ！」

突然、突起が壁からすっぽりと抜けた。俺はしこたま尻で餅をついてしまった。

「痛だだだだだだ……！ 尻割れるー！！ あっ！ もう割れて

た！ いだだだだ！！！！……って、」

なんじゃこりゃあああああ！！！！！！！！

俺は、しっかと握り締めていた突起 であつたモノを見て絶句した。

そう、突起は、突起ではなかったのだ。突起ごく一部分が、岩壁から控えめにコンニチハしていただけだったのだ。さながら、厳しい監視を掻い潜って社会の窓から世界を覗くブリーフの様に。

かくして全貌を現した謎の突起の正体、それは……

「……剣？」

そう、剣だった。シンプルながら気品の漂うフォルム。青銅色のボディ、いかにもそれっぽいい宝石。言い訳しようも無いほどの剣だった。

「え？ え？」

え？ なにこれ、ヤマトタケルの遺産 ！？ よっしゃ、ノーベル賞は俺のもんじゃああああ！

だが、確認できたのはそこまでだった。

ぱしゅんっ！！！！

「うおっ！」

唐突に、剣からまばゆい光が発せられる。

えええええ。ナニこの剣、太陽拳の使い手！？ うわっ！ まぶしい！ めっちゃまぶしい！ 視界がホワイトアウト状態だよ！！

まばゆい光に洞窟は白く染まり、飛散し……

やがて、静寂の闇へと戻った。

「……おおう？」

おそろおそろ目を開ける、

「NOOOOOOOOOOOO！！！！！！！！」

世紀の大発見が消えてるうっう！！！！ 跡形も無く消えてる！！

！ そう、剣は、跡形も無く消えていた。

「……お兄ちゃん……何で蛭消えてしまっくん……？」

人生の無情を噛み締める暇も無く、次なる異変が。

ずづづづづづづづ……

え？ え？

えつつと、真に僭越ながら洞窟さん、揺れてません！？

地響いちゃってません！？

なんかイライラしてます？

貧乏ゆすりとか、しちゃってません！？

落ち着け、こういう時こそ落ち着け俺。大自然の息吹を感じる。

「あの、洞窟さん、ちよつと、頭冷やそうか……？ もし、悩みと
かあるなら相談乗……」

ずがごん！！ がごおおおっ！！！！

どうやら自然様のお怒りは俺の中途半端なお悩み相談室では静まら
なかったらしい。

何故なら、俺が今立っていた地面が「ぱかつ」と無くなってしま
ったのだ。

「ぎゃいやああああああああああ！！！！！！！！！！ 落ち
るうっうっうっう！！！！！！！！」

後にはぼっかり、黒い穴。

第四話：Ice Girlと俺。

「っ！。あいたたたたたたたたたたたたたあいたたたたたいたたたたたたたたたたたたた……た？」

どうでしょか。『た』の多さで至上稀に見る痛さを表現してみる高等テクニク。んで、やっぱり気になるのは

『……た？』

の部分。疑問符。

そう！ 穴の底、つまり今俺の目の前には、摩訶不思議アドベンチャーな光景が、ちよつと恥らいながらも、しかし大事なところはガツ！ とさらけ出してコンニチハしていた。

「だあああ！ んなンじゃこりやあああああああああああああああああああああゝゝゝっ！……！！！」

俺絶叫。

壁一面を埋め尽くすメカ。

超メカ。

超未来的なメカが、青い暗闇の中でピコパコピコパコ点滅しているのであった。

「メガアゝツ！ メメがあゝ！」

そして、その中心に、『ソレ』はあった。

それはもう、理解の範疇を二億光年周りほど超えまくっていた。

それは、荘厳だった。

それは、可愛かった。

「……おんなの子？」

おにゃのこ。

そう、何を隠そう、おにゃのこがおったのである。それも、唯のおにゃの子ではない。なんちゅうか、にゃんにゃんな感じというか……アイドルを48人くらい縛って束にして足して百乗したくらい、超絶に可愛かった。

腰まで届く白い髪。

ふさふさと長い睫。

真赤な衣から覗く、透き通る白い肌

絶妙な曲線を描く太腿。

そして、ああ、谷間もあらわに大豊作な胸元……。

「NOOOOO！俺ってば、女体の神秘について哲学するあまりついに脳内妄想具現化能力を会得してしまったのか……！？ああ、自分が怖い。」

いやいやいやいや、そんなわけねえだろ。いや、むしろその方が良かったぜ。この否現実な光景よりは。

「あ、あの……君、こ、こんなところで一体何を……」
うん、やっぱりどんな状況においても、コミュニケーションを試みる事は大事だね！うん、でも、美少女さんの美しさに目を奪われて、俺は重要な事を見落としていたわ……。

「うん……聞こえない……デスヨネ。氷漬けじゃ……。」

そう……。何が楽しいのか、謎の美少女さんは全身氷に身を包んでいらっしやったのである。何だろう、最近の若者の間では氷漬けが流行ってるんだろうか。『モテカワスリムの氷漬けダイエット』とか。

「……ていうか、も、もしかして、死んで……る？」

ひゅるる。

冷たい風が足元を舐めた。

「あわわわわ、だ、大丈夫ですか！？ い、生きてますか！？ 死んでませんよねっ！？ 死んでたら返事してくださいっ！」

コンコン

返事が無い、唯の屍のようだ。

「おおおおおおつあばばあお……ばぶー。」

新発見。人間、あまりにショッキング事態に遭遇すると、幼児返りする。覚えておこうね。

つて、死んでるうううううううう！！ ま、まさか殺人事件！？

死体遺棄！？ ……はっ！ 犯人は……この場所を知っていて、そして、ここに誰かが侵入する事を防ごうとしていた人物……。まさか、じーさん！？ い、いやいやそんな、まさかまさかまさか、まさかまさかまっさかさま。

「よし。」

見なかった事にしよう。ていうか、見なかったなにも、何も無いし！ ……どんなに目を凝らしても俺には空気中の電子と陽子しか見えま、せん！ よーしよーしよーしよー……

嗚呼っ！ どうしてもボンバーな胸の谷間に目が行ってしまふ。思春期真っ盛り男子の哀しさよ。

「うっ……む」

しかし……この娘、ホントに死んでいるのだろうか。

俺は考える人と化す。

そうは思えないほどに少女は美しかった。

だがしかし彼女は冷凍マグロが如く氷の柱に閉じ込められていて、足元に青白い光が、ほわほわと舞っているのだった。

その光景は、恐怖や不可思議さを通り越して、逃れ難い魅力を発し

ていた。

抗いがたい欲求の前に、俺は氷越しの少女をまじまじと覗き込む。
う~~~~ん。

頬には薄っすらと紅がさしている様に見えるし、唇はつやつやと潤
んでいる…

…それにしても、この生生しさときたらなんだ！

このボンバーでセクシーな胸元は犯罪級ですな。ハアハア。いや、
見てませんよ。見てないけどね！

さらにグツと顔を近づける俺。もはや覆いかぶさっている状態。

「う~~~~ん、たまりまへんな。デヘデヘ。しかしなんちゅうか、
今にもこう、目がパチツと開きそうな。」

ぱち

「ぎゃあああああああああ！！！！　ばいおはざああアどおお
おおー！！！！！！」

なーいすなタイミングで謎の美少女さんがうえーいくあつぷ！　す
るやいなや

「あああああの、ぼぼぼ僕は決して怪しい者ではなくてですね」

必死で言い訳を開始する俺。何いつてんだろっ、最大級に怪しい少
女に向かって。

いやはや、どうやら俺の咄嗟の弁明は通じなかったらしい。
なぜなら

どがああああ~~~~~~~~ん！！！！！！！！！！

美少女が爆発したからだ。

「すんまっせん!!! なんかもっ本当すんまっせん!!!」

新発見。人間、本当にテンパったときには、とにかく謝る。

第五話：美少女と俺。

「すんまつせん!!! なんかもう本当すんまつせん!!!」

爆風の中、俺はひたつすら土下座していた。

え？ 何！？ 何なの！？ 新手の自爆テロ！？ 俺がエロかつたから自爆テロ！？

俺、大パニック。

もはや物事の因果関係も正確に把握できません。

ばしばしと飛散する石つぶて。

「いたたたっ！ そうだ、女の子……あの女の子は」

最悪の場合、せめて骨だけでも拾ってやらにや。

なんとか、爆風に立ち向かう俺。

と、その瞬間！

「そう、しょおおお~~~~~っつ！」

どごおおおっ

「げべぶっ」

爆風の中から美少女が、華麗に吹っ飛んできた。みぞおちに。そしてそのまま腕を絡めてのしかかると

ぎゅむっつっつっつっつっつっつ。

い、今起こった事を、あ、ありのまま話すぜ……！！

『美少女が爆発したかと思ったら、いきなり抱きしめられてぎゅうぎゅうされてた』

い、意味がわからないだろうが、お、俺も、何が起こったのか、わからなかった……！

「そうしょお……やっと……迎えに来てくれたんだあ……ぐしゅ……、会いたかったよう……！」

ああもう、ワケが解らない、ワケがわからないが、瞳をつるませ、ハラハラと涙を流すとびっきりの美少女に抱擁されスリスリされ、それを嫌がる男がこの星に居るだろうか。

「なななな、何ですか、そうしょおって何ですか？ 倭国伝ですか。てか、お、おじょうさんっ、ちか、近い、そんなに近づくとも目の前がむぎゅうつうつ。」

あなたの胸元のキャニオンが俺の顔面にこんにちはしていらっしやるのですが。

ああ、視界一杯にメロン畑が大豊作なわけでえ！！ 呼吸が出来ないわけでえ！

「はう、そうしょ、そうしょおお……。ひつく……。ぐしゅ。」

そうこうしている内に新たな異変が。

めぎやめぎめぎゆめぎよぎよぎよ……

全身の骨が不吉な音を立て始める。

少女の細い腕が、もんの凄い力で全身を締め上げているうう！ その力、プレス車並み！ なにこの怪力！！

「むぎゅあああ！！ もめっ！ ほえまむうえうー！！ むぎゅ、むぐぐ？へは、へはほんえへむぎゅあぐがめ？あまつ！あまんむぎゅまばっばんぶばぶう~~~~っ！？」（ぎゃあああ！

骨！骨が潰れるうう！あ、あれ？あの、手、手が、動いてま

すよね！？　な、何まさぐっているんですかあああ~~~~っ！？」

悲鳴を上げる骨、内臓。

だがしかし、それどころではない別の問題が急浮上。

美少女の手が、心無し全身をまさぐっているような。心なしって言うか、思いつきりズボンの中に侵入ってきwせd r f t g yふじこlp!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

「ばめてっつ！　ほほはめは、ふゃん、や……っ、んのおおっ！！！！（やめて！！　そこだけは、ご、勘弁、のおおおっ！！！！）」
「んー、そうしょお……好き。」

このアマ聞いちゃいねええー!!!!!!!!!!!!!!!!!!

あ、そろそろ、息とか骨とか理性とか色々と限界なんです。あ、気の早い脳が走馬灯上映会を開始した様なんです。ああ、生まれて初めて受けた告白が、最後に聞く言葉になるなんて！

「ぶは」

唐突に、ふっ、息が出来るようになる、たわわなメロン畑が遠ざかって……変わりに、そう、うつとりと瞳を閉じた壮絶に美しい顔が、プルンすぼめた唇が、ズーームイ……

ちゅッ

「！？！？！？！？！？」

湿った、やわらかな感触が、伝わってくる。

ああ、とんでもなく可愛い少女のクチビルが！　生まれて初めての感触が、今まさに……
鼻に。

⋮
! ?

ちゅ うちゅ うちゅ うちゅ うちゅ うちゅ うちゅ

ぎゃ。吸わないでください！！
痛いから！
痛いから！
舌を入れないで！！！！

「
ン

ツ
ッ
! ? ! ?
」

あ、なんか、感触が、鼻を舐められまくっている感触がするよおおお！

ペロペロしないで！

嬉しいけど人間として大切な何かを失いそうだからしないで！

あ、佐藤ん家のチャウチャウに襲われた時の懐かしい思い出が……。

「ん……宗彰お、キス、下手になった……?? それになんか、しよつぱ……」

ゆっくり少女が唇を離す。そしてうつとりと俺を見つめ……

「……ん？」

ぐ
い
つ

と俺の胸倉を掴んでまじまじと急接近。

あの、美少女さん、そんなに可愛い顔を近づけますと、僕の心臓が自爆エロしそうなんです。

美少女さんのうつとりと夢見る乙女の瞳が、猛スピードでに険悪な物に変わっていく。まるで、ひっくり返つてもがくムカデを見つめる様な眼に……。

あ、なんかヤバイ。と、思う間もなく

「嫌ああああああああああああああああああ！！！！！！」
 「……誰、こいつうゝゝゝゝっ！？」 宗彰じゃ無

いっ！ 嫌ああっ！！ 超キモイツ！ 嫌アアアアアッ！！！
！

どこがああああああんっ！！！！！！！！

大爆発、再び。

第六話：デッドチエイスと俺。

ああ、この洞窟、随分な山奥まで食い込んでたんだなあ……。

久しぶりに再会した空は、オレンジ色に染まっていた。

朱と藍の入り混じった空を背に、キラキラと星をばら撒いた様な瞳が、キツと俺を見据えている。

綺麗だ……。どんな男だつてO・一瞬でK・O確定。

えー、まあ実際、洞窟が一瞬で吹き飛んだわけですが！

ひゅう。と、風が少女の長い髪をなぶる。ついでにボロボロに擦り切れた服がはためいて、あ、見えてます、もうボロリなんてレベルじゃないです。

じつに鼻の下が伸びる、もとい、芸術的な光景であった。が。

きつ！　っと、少女が俺を見据える。

えー、美少女さん、浮いてます。軽く重力無視です。

「いやああっ！！！！　も~~~~っ！　サイアク！　本っ当、サイアク！！　やっとなつとなつとなつと、愛しの宗彰が、瑠璃を助けに来てくれたと思つたのに~~~~っ！！！！　それなのに、なに！！？」

この腐りかけのエノキみたいな男！！！！！！
腐りかけのエノキ……。

ひゅんっ！

と、何かが顔をかすめる。じゅっ、頬に赤い線が走った。何だ今の？　フォース！？　フォースの力か！？　理不尽です。

「ああああっ！！！！　しかもしかあもっ、こんなじゅくじゅくの潰れた水虫みたいな奴に私ったら、この美しい身体を弄ばれて！！」

イジリ倒されて！ あんなとこもこんなとこも弄られてゝゝっ！！
 ！ ああ、唇まで！！ いやあっ！ 汚らわしい！！ まだお便所
 に口づけする方がマシだわ。」

身悶えし、ぺっぺっ！ と、必死で美少女さんが唾を飛ばす。

「ちょ、弄んでないし。唇奪ってないし！　むしろ俺の鼻がびちゃびちゃに汚されたんですが。」

「黙れクソ虫！」

「はひい……」

「ああっ！！！！　瑠璃はこんなド边境の星で、愛しの宗彰にも会えずに野蠻人の夜の奴隷にされてしまうんだわ！！！！　悲劇のヒロイン！！！！　助けてそうしょお！！！！」

瞳いっぱい涙を溜め、泣き叫ぶ美少女。聞く耳もつちやねえ。

「あの、る　瑠璃さん？　ホント、一ミリでもいいから、お話を聞いてくれませんかね！？　宗彰さんって誰ですかねえ！？　っていうか、あなたは誰なんですかね！？」

「瑠璃は瑠璃で宗彰は瑠璃の王子様でラブラブなの〜っ！」

うわぁ……この子、頭が可愛そうな子だ……。絵文字と小文字だらけのブログで、前世での聖戦とか語ってそう。

「はい、そうですか、あのね、瑠璃さん、どうしてアナタあんな洞窟の奥で冷凍マグロになって死んでて生き返ってしかも爆発なんて起こせたりしちゃうんですか。」

「だって、私、瑠璃だもん。」

答えになってない！！！！

「る、瑠璃さん？ 落ち着こう？ 落ち着いてください。ね？ とにかく、建設的な会話をしましょう？ レッツコミュニケーション！」

「むう……」

考えこむ瑠璃。よかった。やっと日本語が通じた……！ いや、違う、アレは絶対、「『建設的』とは何ぞや？」って考えてる顔だ！ 日本語通じてねえええええ！

ひゅっつっつ。

一際つよい風が走り抜けた……瞬間、

サラサラ……

かなり頼りなげだった瑠璃の服が、サラサラと灰になって飛んでいった。

ああ、だいぶ風化してたから……なのに何回も爆発とかしたからな……。

「って、見てません!!! 俺はな……んにも見てません!!! たわわでプルンプルンなプリンちゃんとか、全ツツツ然見てませんから!!!」

ヤバイ、コレはもう、ブチ殺される。核爆発とか起こる。

ところが、意外な事に満面の笑顔。笑顔は敵意の無い証拠。ってアレ? 怒ってない!?

「うん、いいの。風のイタズラは仕方が無いもの。……でも」

ぽわわわわ

瑠璃の手の中に、光の粒が集まっていく。あれ、何か漫画で見たことがあるような。っていうか、ジャンプを開けば毎週どこかのページにあるような光景。

「もう瑠璃、現代社会のストレスやらなんやらで押し潰されそう! もう、何もかも破壊しない事には収まらないわ!」

「破壊 ツ!? 何が!? 何が収まらないんですか!? バストですか!?!」

ひゅんっ!!!

「取り合えず、アンタは絶対、殺す！！！！」

どがああああ

んっ
!!!!

「ぎゃあ ああああ ああああ ああああ ああああ !!!!!!! 11111

」

地面にが挟れ、巨大なクレーターが出来る。

地形が、地形が変わりましたよ！？　あああああ！！！！　見たことある！！　こういうの、映画で見たことある！！！！　ピームを发射したのはシュワちゃんだったけど！！！！！！！！

「ふふ、意外とすばしいんだあ？ でも大丈夫、すぐにこの星ごと消してあげるから！」

微塵もだいじょうぶなんです！
穩やかじゃないです！
すでに話がドラゴンボール規模に！！

満面の笑顔の瑠璃。

なんか、ふっ切れてる。

っていうか、キレてるぅぅ……!!!!

カー | カー |
⋮

夕暮れの境内。

弥生は、むつつりと石段に腰掛けていた。コウが洞窟に入ってからかなり経つ。

「コウの奴、遅いわね……」
正直、壮絶に暇であった。

アホーアホー……

「誰がアホよ！ 酔漬けにするわよ。」
カラスに悪態をつくも、むなしい。

ぐう！

お腹がなる。

帰ろうかしら……。

しかし、弥生も鬼ではない、少しはコウの事が心配である。
探しにいこうかしら……。

二つの選択肢が頭の中でせめぎあった。 その時

「あっ！」

彼女は思い出した。今日は夕方から『ハブられ刑事・純愛派』の
再放送がある事を。

「帰ろっ！」

弥生様は鬼であった。

「ぎゃいああああああああああああっつつ

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

走る走る走る走る走る走る走る走る走る走る……!!

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

桜の森の中を、転がり走る！！！！

後方には、猛スピードで追いかけてくるバケモノ女！ハードは美少女だけどソフトはターミネータと寸分違わぬ模様！！！！

もうね、カールリスも真つ青の走りッぷり！！ほんと、人間、命かかると力の絞り方が違ってくるからね！！！！

「まああああああてええええええええええ！！！！！！！！！！」

この状況で待てと言われて待つ奴あ、真の勇者か真性の美少女マニアだけじゃ！！ボケが！！！！

どがーん！

どがーん！

どがーん！

どがーん！

どがーん！

岩が飛ぶ！！

地が碎け散る！！

辺り一面、乱れ飛ぶ光の弾丸。

あつ、なんかこういうゲームしたことある！！弾幕！美少女の

弾幕避けるやつ！！！！

「ぎゃああああああああバケモノおおおっおお！！！！フリ

ーザ！！！！フリーザだ！！！！美少女の皮を被ったフリーザだあ

あ！！！！」

フリーズされてただけに。

「バケモノですってええええええ！？乙女の心踏みにじってえ！

人の心の痛みを考えなさいよおお！！！！」

がごおおん！！

心が痛むってレベルじゃねえぞ！！！！！！！！！！碎けたよ！？岩が

砕けたよ！？

「こんの冷凍マグロ女ああ！！！！ お前こそ岩の気持ち考えろや！！！！ ちょっと超絶に可愛いからって、何してもいいってわけじゃねーぞ！！！！」

「マ、マグロだおっ！！？？ 違うもん！ 瑠璃はむしろ感度抜群だもんっ！！！」

意味不明の方向で逆鱗スイッチに触れてしまった様だ。

「んんんんうん、もうお許さないんだからあああああ！！！！！！
瑠璃必殺！！　えたあなるふおーすぶりぶりざあああああど！！！！！！
！！！！！！！！！！」

ネーミングセンス悪っ！

「ごおっ！！」

「うわあああ！！！！！！！！！！」

さつきまでとは桁違いの、巨大な火の玉が向かってくる！

「どこがブリザードだあああああ……！！！！！！！！！！」

あ、無理。これは避けきれないわ。

今度こそ俺、死ぬな……。

ああ、簡単に壊れてしまっんだな。日常って。

こんな事なら、もっと本気出して生きてみたら良かったな、はは……。

いつ！！

俺は、観念して目を瞑った。

世界が赤に染まる。

どおおおおおっ！！！！！！

……。
……。

ん？

「生きて、る……？」
なんで……？

こわごわ目を開けてみる。

そこには、愕然と立ち尽す瑠璃が。

「何で……？　なんであんだ……無傷なの！？」

「え、さあ……？」

「う……ん、とらいあげいん！」
げえ。

再び絶体絶命！！
が、

ぼひゅー

出たのは、不思議な擬音とケムリのみ。

「ケホッ！　んううううっ！？」

ぼひゅー

ぽひー…

ぽ

「うっうっう、おかしいにや……力が出にやい……何で？ どうして？」

ガス欠じゃない？

おろおろと慌てふためく瑠璃、やがて、ハッと足元を見やった。

「うあ？」

ほっそりと美しい蹠……。そこに、ふわふわくると白い光の輪がはまっていた。

「ふえええ！！ 何にやこにやああ？？ あう……でも、ここから力が吸い取られてく……まさか、封印！？」

あー、そういえば、じいちゃんも、洞窟の鬼には強力な封印がとか言ってたな。小粋なアクセサリーかと思ってた。

まあ、なにせよ、命拾いしたようだ。ありがとう、昔の偉い人へたりと、崩れ落ちる瑠璃。瞳から、ぽろぽろと大粒の涙が零れ落ちた。

「そんな……。宗彰……。ひっく、瑠璃の事、捨てただけじゃなくて、こんな足枷まで……。どうして……。ろっしてこんな事するの……？ ぐす、わからない、わかあないよ宗彰……。うわあああああああああん。」

大声で泣き出す瑠璃。

「あー……なんかよくわからにあげど、宗彰さん？ もさ、何か、事情があつたんじやないかな、ね。」

「うああああああん。」

だめだ、泣き止まない。

「……い、一緒に探してあげるからさ、ね、元気出しなよ……」
「うえ、ひっく………本当？」

あーあ、言っちゃった。

「ただいま……はあ。なんでこんな事に。」

力ない声が玄関に響く。もう、全身ボロボロ。

背中には、ぐっすりと眠りこける美少女。はい、当たってますとも。色んなところに色んなものが。

その後、少女は電池が切れたようにコテンと眠りこけてしまった。

このまま一生起きなければいいのに。

このまま警察に突き出せば……なんて考えが一瞬よぎったが、翌朝テレビで警察署謎の大爆発、なんてトップニュースが流れそうな気がして思いとどまった。第一、何て説明したらいいんだ。

「うう……何なんだよコイツ……鬼……じゃあ、ないよなあ。鬼だったらまだ良かったのに。こんな美少女、家族に何て説明したらいいんだよ。」

ブツブツとひとりごちる。

ハッ

俺は嫌な視線を感じて振り向いた。

そこには、じーちゃんが、じとーと柱から顔半分だけ覗かせていた。なんとも、微妙な表情をして。

そして、ポソリと一言。

「だから、頭からまるっと食われるって言ったのに……」

ええええええええええええええええ。

そうして、最後のトドメの刺し主は、ニタリと笑い、満足そうに頷いて、のっそりと台所へと消えていったのだった……。

第七話：銀河と朝と騒乱

超銀河群連邦雷光星

未明。

超銀河群連邦加盟星雷皇星皇室特務機関広域宇宙危機管理委員会緊急会議は大混乱に陥っていた。

巨大スクリーンには、青い星が映されている。それこそ、混乱の元凶である。

「監視衛星より入電。最重要監視区域、未開惑星『地球』より、安全基準数値を超える高エネルギー反応を観測。解析の結果、『瑠璃』の生体反応を確認しました。」

どよめきが走る。そして絶望。

「なんだと！ 宗彰様の封印が解けたと！？」

「なんと……なんと忌々しき事じゃ……宗彰様の悲願、たったの千年しか持たぬとは。」

「終りだ。また、銀河は戦乱となる……一夜に幾千もの星が潰える。ああ、悪夢の再来だ。」

「いや、悪夢ならばいずれ覚めましょう。だが宗彰様もなき今では……希望という朝も無い。絶望だ。」

「早急に銀河群総戦力をもって『地球』に総攻撃をすべきです」
なにやら只ならぬ様相である。その時、

「それはどうかしら！？」

凜とした声が響いた。

「百合香様？」

皆の視線が、青い髪の美しい女性へと注がれる。

ずっと白い指が、画面を指差した。

「早まっちゃだめ。だって、『ちきゅう』とか言う星、まだ丸いじゃない。」

「は……？」

「『瑠璃』が本当に復活したなら、今頃跡形も無く消し飛んではずよ。」

「そ、それは……確かに、そうだが……。しかし現に『瑠璃』の生体エネルギーが観測されている。」

「何か理由があつて、思いとどまって居るのかもしれない。下手に刺激するのは、眠っている獅子を蹴る様なものよ。今までだってそうだったじゃない。」

「」

「状況を正しく見定めなければなりません。あんな画面でも数値でもなく、誰かが、実際に、その目で！」

「し、しかし……あんな危険区域に一体誰が……」

百合香の唇が、ほろりと笑む。

「偶々然！ ワタクシ、うってつけの人材を知っております！」

それはそれは、満面の笑みだったという。

チュンチュン……

ひらひらと、桜の花びらが窓から迷い込む。

眩しい太陽が地球に降り注ぎ、俺の瞼を焦がす。

朝。それは希望。光に満ちた一日の始まりである。しかし一方、甘い眠りは最高の現実からの遊離であり、未だ人類の逃れがたい三大欲求の一翼を担っているのである。その力を侮ってはいけない。

何が言いたいかって言うと、
眠い。

「うっ……あと二分……」

ベッドの中で、寝返りをうつ。

重い瞼をこじ開けようと試みるも、敗北。

「ん~~~~~っ。」

俺は、絡み付く睡魔を振り切ろうと、思いきりのよい伸びをした。指差までいっぱいに広げて

もにゅ

「ん？」

何か、恐ろしくやわらかい物が手に当たった。

何だ？ 覚えず、感触をまさぐる。

もにゅもにゅん

恐ろしく柔らかかで、それでいて弾力があって、温かくてプルンプルン……

！

瞬間、一気に目が覚める。背筋に寒いものが走った。カッ目を開けると、物凄い勢いで布団をめくる。

半裸の美少女がいた。

美少女はすうすうと寝息をたて、鼻先約十センチ横にその身を埋めていた。

それはそれは、天使のようにあどけない寝顔だった。

そして、俺の手は……あるうことが、大胆にはだけた胸元をもぎたてピーチ掴み取り収穫祭。

「づつあああああああ！！！！」

物ツ凄い速さで、昨日の記憶が蘇る。そうだ！俺は昨日洞窟で美少女を発掘して爆発して追いかけて殺されかけて泣かれて結局保護して……えーっと、確かその後とりあえず客間に寝かせたんだよ。こつそり。

つて、なんで俺のベッドに居るんだああ！！！！

落ち着け、落ち着け俺。何もやましい事はしていない。たぶんしていない。まずは、速やかにこの場を離れ、庭であざとく爽やかにラジオ体操をするのだ。絶対に誰にも見られてはいけない！

カチャリ、と不吉な音が響いた。ドアが開く。

「おはよ！ コウ、起こしに来てあげたわよ！ まったく、休日だ
といつも昼まで起きないんだか……ら……」

ドアから、遠慮なく弥生が入ってきて……止まった。
時が止まった。

弥生の目が驚きに見開かれる。そして、たつぷり三秒間、ベッド
に眠る半裸の瑠璃を見た。天井を見た。そして、俺を見た。
般若でした。

「コウ……。この……。輝くばかりに美しい娘さんは誰かしら……
？ 答えによつては……。千切る。」

どこを！？

それから俺は小一時間、ただひたすらに宥めたりすかしたり土下座
したり殴られたり蹴られたり吐血したり宙を舞ったりしてやり過
した。いや、過ごせてないけど。

その間、この大出血祭りの元凶は、さんさんと日の光を浴び「ぴ
すす」「んうう」「むにゅ……」などと音を立て、子猫のように
大安眠中であつた。

もちろん、お手では可愛くグーのポーズで。

こいつ、ロケットに括りつけて宇宙まで発射したろうか。

やっと、なんとか弥生が聞く耳持つてくれたのは、瑠璃が気持ち
よさげに十五回目の寝返りを打った頃であつた。

「……つまりアンタは、あの爆裂美少女は洞窟の奥で氷漬けになっ
ていたのを拾ったものだ、すぐ飛んだり爆発したりするので非常に
危険である。なぜ俺のベッドで寝ていたのかは全く解らないが、も
しろん粉微塵もやましい事はしていない、と言ふのね？」

腕を組み、眉を釣り上げる弥生。その表情は、奇跡体験アンビリ

バボーの超能力対決とかを見ている時と同じだ。信じてねえなこりや。

はあゝ、まあそれが普通の反応だよなあゝ。

「信じるわよ」

「へ？」

「だってそんな事でもない限り、ゴミ虫以下のアンタがこんな超メガ級美少女とベッドイン出来るわけないでしょ。」

「ごもつともでス……」

ああ弥生、信じてくれてありがとう。洞窟でファンタジーよろしく美少女を拾う確立VVVV俺に彼女出来る確立ってことですね、わかります。死にてえ……。

「んうゝ…宗彰あゝ……………うゝ…？　ここあどこ？　ほれひれゝ？」
もそもぞとベッドから声上がる。

お姫様の起床の様だ。

「ふうあゝゝ、何このベッド、粗末でごあごあしておまけに臭ゝゝい！　超サイアクー。」

その割には爆睡でございましたが。

むくりと瑠璃が身を起こす。長い白銀の髪がサラサラと肌を滑り落ちていく。とろーんと閉じた瞳は、己の素肌露出面積の著しさにも気付かぬご様子。あ、そんな状態でいきなり伸びなんてしないでください。辛うじて隠れているセクシーゾーンが……ああ……。

やつ、だから決して故意に見ようとした訳じゃなくてですね、不可抗力で目に飛び込んで来たんですよ！　痛い痛い痛い！　だから弥生ちゃんお願い目玉を挟らなで！！

そんな俺の世界規模で見れば実にしょーもない苦悩を他所に、瑠璃は爽やかに思う存分伸びきると、泥だらけの身体を見渡して。

「温泉！　持ってきて来いっ！」

実に爆裂マイペースな命令を発したのであった。

温泉はデリバリーするものに非ず。入りに行くものです。

というわけで瑠璃はひとまず我が家の風呂場に連れて行く。扇情的過ぎるボディはひとまずＴシャツの下に収納していただいた。ふよふよと宙を浮いて移動する瑠璃を見て、流石の弥生も絶句する。

我が家の浴室を見て瑠璃は絶句した。

「なんぞこれ？」

「お風呂だよ。」

「おフロ！？ この狭くて足も伸ばせないドブ溝が！？」

「なんだと！？ 日本のごく一般家庭風呂にケチを付けるか。これでも一応奮発して日本秘湯の元とか入れてんだぞ」

「おフロなのに滝も無いのっ！？ 無重力体感深海風呂は！？ 黄金の砂風呂はっ！？」

ねーよ。どんなサバイバル風呂だ。

「イヤアアあああゝゝ！！ 温泉んんん……………！！」
ぱたん。

俺は浴室のドアを閉めた。悲痛な叫びを残して。

やがて、諦めたのか衣擦れの音、そして涼しげな水の音が響きだす。ぶちぶちと文句と共に。

「あううゝ……………狭いー……………」

「はうゝ……………温泉んー……………うゝ。はううゝ……………」

「はうゝ……………ああゝ、びばのんのん……………」

満喫してんじゃねえか！

腹が減っては戦は出来ぬ。

と言っわけで、一時台所へ戦略的撤退。

「どうすんのよ、アレ……………。……………飛んでたわよ、空。」

カパンと生卵をご飯に落とし、弥生が問いかける。

「ビームも出ますぜ、旦那。んく、……どうするったってなあ……ズズ。」

味噌汁のワカメをすする。成り行きとは恐ろしいもので、気がつけば前門の虎後門のわけわかめ。

「うふふ、あらあ弥生ちゃんコンニチわあ。ゆつくりしていつてね。」

お袋が満面の笑みでアジの開きを運んでくる。今日はいつに無く上機嫌だ。全く、見知らぬ美少女に風呂場を占拠されているのも知らないで、呑気なもんだよ。

……ん？

俺は食卓に並べられた皿に目をやる。ひーふーみーよー……一膳多い！？

「うふふ、昨日コウがベッドインしていたカワイコちゃんのご飯やお。あら、今はおフロかしらあ？」

ニコニコとおふくろが笑う。
しええええ。

「うふふ、昨日は、お楽しみでしたねえ。ずっと部屋に閉じこもってギシギシバタバタ。お母さん、興奮しちゃってお父さんと久々に電話で……」

電話で！？ 電話で何をしたの！？ でも知りたくない……！

「お、おおおふくろっ、違うんだってばよ！」

「あら？ いいのよ？ 母さん過激な恋愛にはイタリア人並に開放的だからあ。それに、あんな超絶美少女連れ込むなんて、母さん鼻が高いわあ。今日は弥生ちゃんも混ぜるのね？」

聞いちゃいねえ！。って、混ぜ……？

「うふふ、思い出すわア。コウが赤ちゃんの頃、オシメ換えのたびにこりゃあ女泣かせになるぞって、親戚中で感心したものヨ」

ほうつ、と、遠く思いを馳せるおふくろ。一生知りたくなかった新事実発覚。黒歴史にも程がある！

「……でも」

そつ……と、おふくろが湯呑を握る。

「男の子の責任はちゃんと取りなさいネ？」

ピシッ

湯呑にヒビが走った。

お母様、責任の取り方がわかりません……。

生きた心地のしない朝食、終了。

続いて

「……それにしても、そのピチピチハチキレムンムンボディに布切れ一枚は、とおってもセクシイすぎるわねえ……」

ハイパー着せ替えお人形ごっこ開始。

「あらあら、ぴったり！ あらあら、可愛い！ お母さんこのワンピース、サイズ間違えて困ってたのよ……。これは運命だったのね。」

無邪気に歓声をあげるおふくろ。って

「なんでミニスカチャイナ服なんだよ……」

「可愛いからよ？」

一言で済ます母。可愛いは正義！

って、ねえ、可愛いからって、それ、普段着にする気かよ？ コスプレだね？ 大体、なんでそんな異常に丈が短いんだ。っていうか、それどう見ても男物の上着だね？ ワンピースって言いつけるけど、上着だよな！？ セクシーさに拍車が掛かってますヨ？

「うふふ、素敵、とおってもセクシーで、おまけに可愛くなったわあ。もう向かう所敵ナシよお！ 最強よお！ お母さん嬉しい！」

おふくろ、自重しろ。

「でもオバサンのお古じゃあやっぱり少し華がないわね？」
首を傾げるおふくろ。

「仕方ないわね！ また今度、私が何着か持ってきてあげるわよ。」
さっすが、ガキ大将気質な分、なんだかんだで根は面倒見の良い
弥生である。

「っえゝゝゝっ、この貧乳娘の服を着ろっていうの？ ムリムリ、
このバストが収まるわけないよ」。胸が押し潰れちゃう！！」

「んなつ！」

空間に亀裂が走った。

くるっと、華麗に回る瑠璃。迫力のたわむバスト。その姿は薔薇の
様に愛らしかった。そして、固まる弥生をスルーして鏡の前で決め
ポーズを始める瑠璃。その姿にきゃーあ可愛いだの、わーお素敵な
どと嬌声をあげるおふくろ。手にはちゃっかりデジカメ装備。
ぽん、と、俺の肩に弥生が手を置いた。

「コウ……あんのクソ生意気な爆乳女は、一体いつ洞窟にお帰りに
なるのかしらねえ……？ あんた……責任取んなさいよ……。」

爪が、爪が痛いです弥生さんー！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2963e/>

幸せが猛ダッシュでやってくる

2010年10月11日11時05分発行